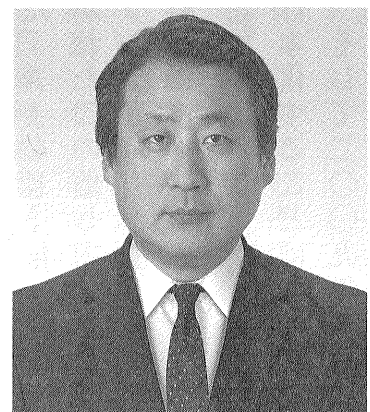


DVDブック

『カラコルム／花嫁の峰チヨゴリザ』の刊行に携わって

小樽商科大学ビジネス創造センター教授

澤田芳郎



1. はじめに

二〇一〇年三月、国立民族学博物館顧問の梅棹忠夫先生を監修者にお迎えしたDVDブック『カラコルム／花嫁の峰チヨゴリザ』（フィールド科学のパイオニアたち）が、京都大学学術出版会から刊行された。京都大学カラコルム・ヒンズークシ学術探検隊（隊長・木原均京都大学農学部教授、支隊長・今西錦司京都大学人文科学研究所講師、一九五五年五月～九月）および京都大学学士山岳会チヨゴリザ遠征隊（隊長・桑原武夫京都大学人文科学研究所教授、一九五八年五月～九月）のそれぞれ記録映画である『カラコルム』（日本映画新社製作・東宝配給、一九五六）、『花嫁の峰チヨゴリザ』（同、一九五九）の二枚組DVDに、探検隊と登山隊の活動と背景（第一章～第五章）、その後の

京大フィールド科学の多様な展開（第六章）、さらに記録映画史に照らして両作品の意義を問う論考（第七章）を収めたvi+二十六ページの書籍が付されている。

筆者は同書の刊行委員会の一員ながら主として関連情報の収集や関係者探索に従事し、原稿面の貢献はわずかであった。しかし企画の発端に居合わせてしかるべき関係者につないだあと、執筆者の提案から「あとがき」の原案起草に至るまで、全期間に関与し続けた。本書は刊行直後の三月末に京都大学を去った筆者にとって京大では最後の、そして本務として携わっても詳細を公表できないものがほとんどの中で公表できる数少ない従事案件であり、上記「あとがき」も一部用いて経緯をご紹介したいと思う。それは大学教員と呼ばれる人たちのチームワークがどのような形

成されるかの事例にもなっているだろう。

なお、探検隊はパキスタン、アフガニスタン、イランの三カ国で植物学、人類学、地質学の調査研究にあたり、登山隊はパキスタン国内のチョゴリザ峰七六五四メートルに初登頂した。カラコラム、カラコルムは山脈名、地域名としていずれも通用しており、探検隊名は前者を、映画タイトルは後者を用いている。

2・刊行までの経緯

二〇〇八年二月、ある学術映像関係のシンポジウムが京都市内で開催された。パネリストの一人だった株式会社日本映画新社の山内隆治事業部長（当時）が終了後の会食に出席された際、たまたま正面に座ったのが筆者だった。筆者が京都大学産官学連携センター教授としていわゆる産学連携コーディネイトに従事していることを承知された山内氏は、日本映画新社が著作権を持つ『カラコルム』『花嫁の峰チョゴリザ』を京大関係の出版社でDVD化するというかねてからの構想をその場で提案された。

本件を尾池和夫総長（当時）に持ち込んだ筆者は、同総長のイニシアチブで学内に設置されていた「デジタル・アーカイブ（仮称）ワーキング・グループ」の長だった田中耕司教授（京都大学地域研究統合情報センター）に相談するよう指示を受ける。田中教授がただちに京都大学学術出版会に打診したところ企画が立ち上がることになり、担当者も決まった。ここで筆者は記録映画に関する論文を発表

していた飯田卓准教授（国立民族学博物館、京大出身）を執筆陣に加えることを提案した。一方、出版会は田中教授の紹介で京都大学学士山岳会（AACK）の会員である松林公蔵教授（京都大学東南アジア研究所）に接触し、さらにその紹介でチョゴリザ遠征隊員の平井一正神戸大学名誉教授（システム制御工学、京大出身）および高村泰雄京都大学名誉教授（熱帯農学）に協力を求めた。AACK事務局の竹田晋也准教授（京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科）も加わる。こうして刊行委員会が構成された同年四月には、松林教授が京都大学側の代表を務め、筆者が探検隊、登山隊に関する資料収集を含む関連コーディネイトを担当することが決まった。

問題は企画が出版経営的に成立困難なことだった。このため二〇〇九年二月、松林教授の所属する研究所を幹事部局とする総長裁量経費の申請書が大学当局に提出された。一方、これとは別に進行していたのが『チョゴリザ登頂五〇周年記念シンポジウム』だった。AACK主催で二〇〇八年十一月三日に京都大学で開かれたこの催しではチョゴリザ初登頂の偉業をふりかえり、またその後さまざまな学問を究めたAACK会員が京都大学のフィールド科学の展開を発表した。登頂者の平井名誉教授による講演をはじめ、この機会に集約された論考を単行本化することはAACKとしても歓迎するところだった。そして二〇〇九年五月には総長裁量経費が認められ、関係者による執筆が本格化し、解散した日本映画新社の権利を承継した東宝株式会社との

調整も完了して、DVDブックの刊行に至ったのである。

3・裏方の裏方

一連の過程で京都大学学術出版会の編集者が果たした役割を「裏方」と称することができるなら、筆者は「裏方の裏方」だったことになる。すなわち本書における筆者のスタンスは日常業務のそれであった。権限を持つ立場に立つのではなく、さまざまな関係者の思いを見極めながらそれらがいずれも成立する条件をつきとめ、人々が自ずと参画できるスキームをその場で作っていくのがコーディネートの主たる役割であるが、それにしても珍しい成功続きだったと思う。第一のヒットはマダガスカルをフィードとする人類学者にして記録映画に詳しい飯田准教授の存在を知っていたことである。同氏には「第一章 戦後学術調査の黎明」「第七章 エクスペディション映画の系譜」という優れた原稿を書いていただき、筆者もコーディネートとして大いに面目を施した。

第二のヒットはカラコラム・ヒンズークシ学術探検隊に同行した朝日新聞記者が健在でおられるのを発見したことだった。朝日新聞の記事データベースを検索すると戦時中の同紙の報道を検証する最近の記事で同名の元記者が取材に応じており、年齢も合致するのである。知人の朝日記者に調べてもらおうとまさしくご本人で、探検隊に関するインタビューも実現したいへん喜んでいただいた。さらに筆者が探検隊、登山隊関係の当時の雑誌記事等をフォローし

ていたことから、探検隊員が当時書いた報告エッセイの適切なものを選んで「第二章 探検を語る」に収録することができた。

後期の作業としては映画のスタッフおよびそのご家族の探索があげられる。京都大学カラコラム・ヒンズークシ学術探検隊の英文公式報告書には探検隊を撮ったカメラマン二名が並ぶ良い写真が掲載されていたが、これを書籍に収めるにはご家族の許諾が必要である。カメラマンはいずれも一九八五年に逝去されており、日本映画新社のOBルトでもご家族の所在はわからなかった。結局、カメラマンの一人に関してには出身地の市役所が作成し、現在は市立図書館に管理が移っているWEB上の評伝記事から、図書館経由で連絡できた。もうお一人のカメラマンは困難をきわめたが、やはり肖像写真をご提供いただいたエディター（両作品の構成・編集を担当）のご子息（ドキュメンタリー映画の監督でホームページをお持ちだった）の情報により、カメラマンのご親族の勤務先がわかって接触到成功した。最後に両作のプロデューサーのご所在も判明した。そうしているうちに書籍のある個所に当時の映画ポスターを二枚並べて掲出することを着想したが、『カラコラム』の方がどうしても入手できない。しかし、それもカメラマンのご家族が保存しておられたのだった。

執筆者であれインタビュー対象であれ写真であれ、関係者が共通に評価するものが確保できれば自ずと採用になる。条件を整えて実現を待つこの種の仕事は多くの場合名前が

残らず、それこそコーディネータのコーディネータたる所以であるが、いいこともあるかもしれない。今回は二本の映画の章分けと章タイトル付与の作業が回ってきた。何分何秒から何分何秒までを一章とするか決め、名称を付けるのである。映画の仕事に一端とはいえ従事できたことは、筆者にとって望外の幸いであつた。

4・基礎研究とフィールド科学と京都大学とは何か

京都大学は基礎研究に強いと言われ、一方では「探検大学」の異名もなすフィールド科学のメッカであるが、実はこの二点には共通の背景がある。すなわち京大は東大に次ぐ第二の帝国大学として一八九七年に設置されたが、そこには当時の官僚たちの国家の将来を東大だけに依存していは危ないという問題意識があつた。もちろん東大に日本の学問の土台を構築することを促したうえ、京大にその批判的吟味を求めるわけである。その趣旨は設立当時に起草された行政文書にも十分記載されている。この状況が一方では京都大学の学者をしていつそう根拠の根拠を問う「基礎研究」に向かわせ、もう一方で未知の現象を発見し事実をもつて定説を覆す「フィールド科学」を志向させたのではないか。そして当時の政府は、あろうことか京都大学を京都に作ってしまった。都市文化の特徴として何事も相対化しがちなうえ、首都の地位を剥奪されたルサンチマンを抱える京都においては、正しい理由で東京に逆らうと喜ばれる。このことも京都大学特有の知的風土の形成を助長し

たであろう。

京都大学のフィールド科学にはもう一つ重要な要素がある。それは登山である。登山に必要な素養はフィールド科学で大きな役割を果たすことが多い。したがってフィールド科学者の多くが登山家であつても不思議はないが、さらに京都大学の場合、フィールド科学と登山は今西錦司（一九〇二〜九二）、西堀栄三郎（一九〇三〜八九）、桑原武夫（一九〇四〜八八）という共通のルーツを持つ。ヨーロッパに始まった登山文化が京都ではたまたまアカデミズムと関連を持ちながら発達したと考えられ、また実際のところ、登山に重きを置かなかつたフィールド科学の先達として木原均（一八九三〜一九八六）、水野清一（一九〇五〜七一、京都大学人文科学研究所教授）の存在も大きいのだが、京都大学士山岳会という主として京大出身者による登山団体がフィールド科学の発展に果たした役割には計り知れないものがある。

この学問的伝統の現代における展開の一端は本書第六章に示されている。フィールド科学が京都大学だけのものということは決してないが、その内部に育つた者として、我々刊行委員会はフィールド科学の理念や方法、その伝承の様子、また個々のテーマがいかに立ち上がってくるかを、特に若い世代と共有したいと考えた。そしてそのメディアとして、製作から五十年以上を経ていまだに輝きを失わない『カラコルム』『花嫁の峰チョコリザ』という二本の記録映画が機能することを期待している次第である。